

テートモダンが実施する「近隣地域のためのプログラム」の特質(2)

—〈アフターアワーズ〉中等学校向けプロジェクトについて—

上野 行一

教育学部美術教育学研究室

A Study on the “Neighborhood Programme” at Tate Modern (2)

—A Case Study of After Hours Secondary Project: Sounding Out—

Koichi UENO

Art Education Office, Faculty of Education

1. はじめに

英国を代表する世界有数のミュージアム、テートモダン (Tate Modern)。優れた近現代アートの宝庫としてだけでなく、テートモダンは地域社会に対する精力的な教育活動でもよく知られている。テートモダンの教育プログラムにおける基本的な考え方は、プルーラリズムと構成主義的教育観である¹⁾。この美術と教育の哲学的特質が両輪となり、アートについての解釈と理解が推進されるのである。方法論の核は参加者相互の対話である。

一方、筆者らは全国各地の学校や美術館において「対話による美術教育」を企画し推進している。『まなごしの共有』(淡交社、2001)の刊行を皮切りに、横浜シンポジアにおけるシンポジウム開催、「オシャベリ@美術館」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2002)企画協力、美術鑑賞教育セミナーの開催(川村記念美術館、2003)、学校向け「ティーチャーズキット」の製作(2004)を伴いながら、地元高知と四国地方はもちろん北海道から東京、千葉、栃木、神奈川、愛知、岐阜、三重、大阪、兵庫、岡山、山口、宮崎と各地の学校や美術館でプロジェクトを展開しているところである。²⁾

テートモダンの対話を核としたプログラムから学ぶべきところは多く、両者が共振することから今後の深化充実が期待される。

テートモダンには6つの教育プログラム³⁾があるが、拙稿『テートモダンが実施する「近隣地域のためのプログラム」の特質(1)』⁴⁾では、テートモダンの〈近隣地域プログラム〉のうち〈アフターアワーズ〉初等学校向けプロジェクトを取り上げ、英国のナショナルカリキュラム (National Curriculum) との関連を考察するとともに、地域の公的教育施設としてのミュージアムの今日的な在り方を検証した。

本稿では、〈近隣地域プログラム〉のうち〈アフターアワーズ〉中等学校向けプロジェクトを取り上げる。さらには〈展示に関連したイベント〉から〈スタディ・デイ〉を取り上げ、ミュージアムと地域の教育について考察を深める。学校教育とリンクし、テートモダンも含めて地域が一体となっておこなう教育のケーススタディからは、今後の教育を考える上で重要な示唆が得られると考えられる。

なお、本稿は2003(平成15)年1月に文部科学省科学研究費補助金(課題番号14651060)の助成

を受けておこなった実地調査に基づいている。

2. 〈アフターアワーズ〉中等学校向けプロジェクト：「サウンディングアウト」の概要

この3年間のプログラムは、サザーク地区の美術・レジャーサービスに関する新しい開発基金事業の一部である。「サウンディングアウト」はペッカム地区⁵⁾の聖使徒トマス大学カトリック男子中等学校とのパートナーシップにおいて進められた。

初年度には、14人のキーステージ³⁾の生徒がアーティストのジャネット・ホジソン (Janet Hodgson)、作曲家のジョン・ウェッブ (John Webb)、音楽教師のジョン・モーガン (Joe Morgan) と美術教師のケート・ベネット (Kate Bennett) とともに、所蔵作品のサウンドアートの解釈を深めた。解釈の対象は概念主導のものから叙述的なサウンドトラック、格式あるミュージカル曲までの広がりをもつものである。セッションはギャラリーや学校、編集室でおこなわれる。

プログラムの前半は、生徒が収蔵作品に反応するスキルと自信、解釈の向上をねらいとするものである。セッションのシリーズは次のように内容豊富である。

- a. タシタ・ディーン (Tacita Dean) の展示を見る。サウンド・アートワークも含む。特にフォーリーアーティストのビジュアルスコアに焦点をおく。
- b. [裸体・行為・身体] 展の展示作品にたいするまわりの反応をもとにして、体を使ってサウンドアートを制作する。
- c. 「モダン」の概念についての考えを20世紀音楽との関連において探求する。この音楽はストラヴィンスキー (Igor Stravinsky) の「春の祭典」やキャノンボール・アダレイ (Cannonball Adderley) の「ボヘミア・アフター・ダーク」などである。生徒たちは作品にたいする感想を明確に述べ、その分析を彼らが選んだ[歴史・記憶・社会]展の美術作品に適用する。
- d. 映画のサウンドトラックがストーリーを語るためにどのように働くかを探求する。映画フィルムにはバズ・ラーマン (Baz Luhrmann)⁷⁾の「ロミオとジュリエット」、スピルバーグ (Steven Spielberg) の「ジョーズ」からの抜粋などである。
- e. 20世紀の画期となる社会的、政治的な瞬間の探求。たとえば2度の世界大戦、アメリカの市民権運動、冷戦など。そして展示作品を社会—政治の文脈において読みとる。

プロジェクトの中間点で、生徒たちは小グループにわかれ、[歴史・記憶・社会]の中から美術作品を選んだ。それは彼らのサウンド解釈の土台をつくったものである。プロジェクトの後半では、以下の課題で生徒たちは作曲しその作品を記録した。

- ①現代的なサウンドの楽譜を見て、アンリ・プスール⁸⁾ (Henri Pousseur) の「『エレクトラ』電子音響+声楽」、キャシー・バーバリアン (Cathy Berberian)⁹⁾の「ストリップソディ」等を聞く。
- ②彼ら自身のコンテンポラリーで非伝統的な音の楽譜を書くこと。
- ③異なる音を作ったり、とらえたり、うまく扱うことの実験。伝統的な道具(楽器)を違うやり方で演奏すること。たとえば、水の中に沈められたジャイアントシンバルの響きの音を録音するなど。美術作品の叙述的な要素に相当する音を見つけること。たとえば、ダリ (Salvador Dali) の「秋のカニバリズム」に関連して、手作りゼリーを押しつぶしたり、水をすすったりすることなど。

3. 〈アフターアワーズ〉 中等学校向けプロジェクト：「サウンディングアウト」の考察

これらのプログラムの特質として以下の3点を指摘することができる。第1に作家や作品の選定が今日的で優れていること、第2に既成概念の脱分脈化が図られアートの創造的な経験が促されること、第3に音楽と美術のクロス・カリキュラムの学習として貴重な体験を生徒にもたらすことである。

1998年のターナー賞候補作家であるタシタ・ディーンは、16mm フィルムやドゥローイングなど、さまざまなメディアを使った作品を制作しているアーティストである。船、海、旅といったテーマに基づき、時間の経過とともに、何らかの真実を明らかにしていく過程を重要なものと考えている。その過程においてあらわれる物語は単純ながら観客の想像力を刺激する詩的で知的な作品となる。拙稿『テートモダンが実施する「近隣地域のためのプログラム」の特質(1)』でも述べたように、成長期の多感な生徒たちに、彼らと同時代の存在であり世界的に注目されている新しいアーティストの作品に出会わせることの価値は限りなく大きい。美術は、社会や文化、世界の動向を映し出す鏡である。同時代に生きる彼らこそがタシタ・ディーン作品の最良の観衆になれるはずである。

フォーリーアーティストは、映像と同調する偶発的なサウンドエフェクトをつくるアーティストのことである。たとえば彼らは、セロリを折って骨の折れる音をつくるという具合に、奇妙なものや方法を用いてサウンドエフェクトをつくりだす。

既成概念の脱分脈化という思想はデュシャン (Marcel Duchamp) 以来、現代アートの重要な思想のひとつとして定着しているが、モノの意味が分脈によって変化することを実に簡単な手法で体験させている。

「音」を美術作品の素材とすることも、アートシーンではもはや方法論として確立している感があるが、わが国では美術を19世紀的な絵画・彫刻という概念でとらえる傾向がまだまだ根強い。とりわけ教育の現場では因襲的な美術観が蔓延しているようで、こうしたセッションが日常的におこなえる状況には至っていないが、精力的に啓発につとめることが私たちの使命でもある。

「裸体・行為・身体」展の展示作品にたいする観衆の反応を考察し、それを身体表現するというセッションや、モダンをテーマに音楽作品の感想をディスカッションしその分析結果を「歴史・記憶・社会」展の美術作品に適用するというセッションも工夫が凝らされたもので、何よりもキーステージ3 (11-14歳) の子どもたちに取り組みやすくアレンジされていることが優れている。

近年のアカデミー賞やカンヌ国際映画祭で話題沸騰のバズ・ラーマン監督作品や、もはや巨匠とあってよいスピルバーグの映像作品は、映像と音楽のコンビネーションが際だっているが、やはりキーステージ3 (11-14歳) の子どもたちにとって興味深いものであろうし、彼らの文化生活と密接なつながりのある素材であるといえる。高度なテーマを扱いながらそれをいかに扱いやすく提供するかに企画論議は集中しており、学習者の関心事や日常生活に目配りしてセッションの内容が決定されている。

最後のサウンド作品はCDに録音され、プロジェクトコラボレーションのしめくくりとしてギャラリーで演奏されることになる。少年たちはおたがいのCDを交換しあい、クロエ教育センターで楽譜の展示がおこなわれた。(2001年11月21日から2002年1月31日まで)

プログラムに生徒を引率した聖使徒トマス大学のマーチン・ホールは、感想を次のように述べたものである。

「想像を掻きたてる導入とタイトのエデュケーターの支援によって、展示作品に対する学生の見方や理解が大いに高められた。われわれの教育と結びつき、そして学生の中で結びついた素晴らしいクロス・カリキュラムのプロジェクトだ」

4. 展示に関連したイベント：生徒たちの〈スタディ・デイ〉について

〈展示に関連したイベント〉それ自体は教師や生徒、地域の人々のために提供されるプログラムである。プログラムは次のように構成されている。

- ・教師や若者や地域のグループの人たちにアートに対する自分の見方をもたせる教育
- ・生徒たちの〈スタディ・デイ〉
- ・ティーチャー・トワイライト
- ・教師とグループリーダーのための〈展示キット〉

「学校のためのプログラム」の視点から、ここでは生徒たちの〈スタディ・デイ〉について焦点をあてる。

〈スタディ・デイ〉はキーステージ⁵¹⁰⁾の生徒を対象としている。テートモダンの展示に際して彼らが学ぶ〈アート&デザイン〉の目的・内容に即したセッションが用意される。さらに希望によっては〈アート&デザイン〉に限らず、特殊な主題の専門性も対象にできる。

セッションの内容は展示作品についてのディスカッションとその総括である。生徒たちは作品の横にある解説を読み、メモするのではなく、観察して気づいたことや考えたことを発表しあう。その作品が何に関連しているか、人によって違うさまざまな見方を交流しあい、作品を解釈して見ることを楽しむのである。

たとえば、2001年2月1日から4月29日まで開催されたテートモダンの企画展 [センチュリー・シティ (Century city)] は、ロンドン、ニューヨーク、東京など、20世紀の世界九大都市の芸術と文化を検証するという趣旨であった。日本からは彦坂尚嘉が参加したこの展示作品を通して、生徒たちは多元文化主義やコスモポリタニズムの概念を探求し議論を交わした。

また、2001年5月31日から8月19日まで開催された [アルテ・ポーヴェラ¹¹⁾ (Arte Povera)] では、生徒たちは素材が意味を拡大するためにどのように使われているかに注目した。

参加者のひとり、ケンブリッジのパス・スクールのある生徒は「私は日常的にみる物体について気づかされた。インスピレーションを得るために、これまで以上にアートに注目するようになった。また、自分が熱中している壺の釉薬のテクスチュアについてさらによく考えるようになった」と感想を記している。また別の生徒は「私はマリオ・メルツ (Mario Merz) の編んだ銅線や、ミケランジェロ・ピストレット (Michelangelo Pistoletto) のステンレスに絵を描く効果に深いひらめきを受けた。私も将来自分の作品でこれらの素材を使いたい」と述べている。

ミケランジェロ・ピストレットらによって始められたこのムーブメントは、ガラスやセメントなどの廃材、枝木などの自然材を用いて制作することからアルテ・ポーヴェラ (貧しい芸術) という意味をもつものだが、生徒たちは彼らの作品から刺激を受け、自分の制作にインスピレーションを得ている。アートの歴史や思想について理解するだけでなくセッションが制作に転移したのは、解説を一方向的に教授される形式とは正反対の、生徒一人ひとりが主体的に参加し考えを交流しあえるセッションの形式が、アートの歴史的な問題を生徒自身の個人的な問題に同調させたからではないだろうか。自分の目と頭で作品を解釈しアルテ・ポーヴェラに自己を投入する経験が、その制作思想を他人ごとではなく自分の制作に結びつくものとしてとらえさせ、生徒に深い感銘を与えたのである。

このような経験は「作品を見る」という行為が教えられるものではなく、自ら学びとっていくものであるという意識と自信を生徒たちに植えつけることになる。作品の意味や価値を自分で創りあげる力、すなわち自己教育力がアートを通して養われるのである。

また、作品の解釈には自ずと自分自身の生活経験や記憶、知識や関心事やこだわりが反映される。

作品の解釈とは自己の反映であり、その意味で作品は自己を映す鏡である。

作品を見て考える過程は自己理解の過程でもあり、それを発話することは自己開示にはかならない。したがって他者の解釈を聞くことは他者理解につながり、このような対話を通して互いの解釈を交流させる行為を通して相互理解が図られるのである。

他者と自己との差異に対する理解、そして共感。こうして自己の相対化と他者の多様性の概念という社会的成長にきわめて重要な覚醒が、プログラムに参加する生徒たちに訪れるのだ。

5. 考察

テートモダンは国や国際社会に対するのと同様に、地域にもしっかりと根を下ろしている。最初のギャラリーでの取り決めはバンクサイド・デベロップメント・オフィサーであり、テートモダンの発展にたいする地域社会の重要性を強調するものであった。学校向けの〈近隣地域プログラム〉は、地域の基盤を育むことを可能にする。それはサザーク地区の内部や外部にある豊かな資源や専門的意見を利用して、戦略的に働かせる機会である。最近の英国政府は DCMS's (Department for Culture, Media and Sport: 文化・メディア・スポーツ省) クリエイティブ・パートナーシップのように、こういったパートナーシップの価値を重視している。

テートモダンの〈近隣地域プログラム〉は、EAZの一環としてサザーク地区の地域開発の一環として企画されたものであり、教育を通して地域の生活水準を向上させることを目的としている。

EAZは、1998年にブレア政権の教育改革政策により導入された教育対策特区 (EAZ: Education Action Zones) であり、複数の学校をまとめて共同で活動させる施策である。公立学校がその中心となり、地方教育当局 (LEA: Local Education Authority) と企業、大学や地域コミュニティの代表などが集まり、パートナーシップによって地域の教育をすすめていくものである。

とりわけ、なんらかのアドバンテージを持つ地域に対して、教育水準の引き上げを目標に掲げ、特別区域として重点的に政策をうっている。特別区を設けることにより、地域コミュニティ全体の活性化が求められることとなった。北サザーク地区もそのひとつである¹²⁾。

EAZの優先事項は、学習におけるリテラシーを高め、ICT¹³⁾の質的な水準を高めることをめざすとともに、子どもたちの学習意欲を向上させ、家族とのふれあいを深めることである。テートモダンのキュレータ、ジョリーン・カイザー (Joleen Keizer) はこう語った。「世界中どこでも、おそらく日本でもそうでしょうが、父と母と子ども2人と言うファミリーの典型は過去のものとなっています。とりわけこのサザーク地区にはいわゆるステップファミリーや複雑な家庭が多い。日々の生活の中で家族がともに何かについて真剣に語り合う機会が少ないのです。アートは誰もが平等に語り合うことのできる素材です。アートを通してファミリーが本当のファミリーになれるのです」

学校教育のためにナショナルカリキュラムに準拠したプログラムを企画提供するだけでなく、地域の教育局や企業、コミュニティの代表などと共同して地域の教育的向上のために教育活動するテートモダンの姿に、地域の公的教育施設としてのミュージアムの今日的な在り方を見ることができ。わが国の博物館・美術館についてもこれからの重要課題となることは間違いないだろう。

〈注および引用文献〉

- 1) 詳しくは上野・岩崎『英国の教育改革とミュージアム教育の変容』(高知大学教育実践研究第19号、2004)を参照のこと。なお、Tateの日本語表記は「テイト」と「テート」が混在しているが、本稿では「テート」と表記する。根拠は、Web上のTate Modernに関するサイトについて「テイトモダン」表記が233件に対して、「テートモダン」表記は2621件という流通実態から考慮した

Web上で本論文を検索する場合の優越性である。

- 2) 高知大学教育学部『教育実践共同研究報告書』平成12、13、14、15年版を参照のこと。
- 3) テートモダンの教育プログラムは、次の6つのプログラムで構成されている。
 - 1 生徒のための〈ギャラリーセッション〉と〈スタディ・デイ〉
 - 2 教師や教育実習生のための継続的な専門性の向上
 - 3 展示に関連したイベント
 - 4 近隣地域プログラム
 - 5 リソース
 - 6 デジタルプログラム
- 4) 岩崎・上野『テートモダンが実施する「近隣地域のためのプログラム」の特質(1)』(高知大学教育実践研究第19号、2004)
- 5) ペッカム地区はロンドンでも貧困と暴力、犯罪で知られる地区。住民の70%は黒人や少数民族である。労働党政権は、こうした極貧地域をなくすことをめざして2001年からネイバーフッド・リニューアル・ストラテジー(地域再生計画)を推進している。この計画は、雇用・安全・教育・住宅・健康等行政のすべての分野を網羅する総合的な事業であり、行政と企業、そして住民とのパートナーシップによる地域再生をめざすものとして知られている。
- 6) ナショナルカリキュラムは5歳から16歳までの義務教育段階の学校と国庫補助学校に適應され、以下のように年齢ごとの4つのキーステージ(Key stage)に分けられている。
 - キーステージ 1: 5-7歳(初等学校1-2年)
 - キーステージ 2: 7-11歳(初等学校3-6年)
 - キーステージ 3: 11-14歳(中等学校7-9年)
 - キーステージ 4: 14-16歳(中等学校10-11年)
- 7) バズ・ラーマンは1962年生まれ。シドニーの演劇学校卒業と同時に劇団を結成し、舞台演出家として活躍する。1992年の「ダンシング・ヒーロー」で映画監督に進出、各国の映画賞を多数受賞した。第2作の「ロミオとジュリエット」(1996)で英国アカデミー賞監督賞受賞。「ムーラン・ルージュ」(2001)でカンヌ国際映画祭パルムドール受賞。同作品は2002年、第74回アカデミー作品賞候補となった。
- 8) アンリ・プスールは1929年、ベルギーのマルメディに生まれた。リエージュ音楽院卒業後は電子音楽やミュージック・コンクレートの活動を展開する。ベルギー現代音楽の中心人物であり、ブレーズやシュトックハウゼンとともに戦後欧州の現代音楽の一翼を担った。
- 9) キャシー・バーバリアンはパントマイム、民族舞踏、作曲、オペラ、声楽などの多彩な素地の上に、従来の声楽の常識を覆すような音楽活動を展開。ビートルズの「A hard days night」や「I want to hold your hand」などをバロック風にアレンジして歌ったアルバム「Revolution」で広く知られるようになる。
- 10) ナショナルカリキュラムではキーステージ1-4を義務教育期間と位置づけている。テートモダンでは義務教育終了後の子どもたち、大学進学をめざすAS、A2の生徒から、カレッジでGNVQ資格をめざす生徒やAVCEの生徒など、多様なコースにわたる生徒をキーステージ5として扱い、彼らのために〈アート&デザイン〉の特別プログラムを提供している。
- 11) 1967年頃、ミケランジェロ・ピストレットらによって始められたイタリアの美術ムーブメント。ルーチョ・フォンターナ(Lucio Fontana)のスパツィアリスモ(Spazialismo: 空間主義)と、エンツィオ・クッキ(Enzo Cucchi)、サンドロ・キア(Sandro Chia)らのトランスアヴァンギャルディア(Trans-avant-garde)の中間に位置している。この動向に位置づけられるのはマリオ・メ

ルツ (Mario Merz) をはじめ、カール・アンドレ (Carl Andre)、ロバート・モリス (Robert Morris)、リチャード・セラ (Richard Serra) など名声高く多彩な顔ぶれである。

- 12) 1998年9月～1999年1月の期間に25地域、1999年9月～2000年6月の期間に48地域が実施をはじめ、さらに自治体主導による特別活動がスモールゾーンとして25地域加わった。2001年では、78地域、スモールゾーンが40地域となっている。

2001年度森基金 海外フィールドワーク報告書「英国における民間との連携と学校格差」慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科ネットワークコミュニティプロジェクト教育改革調査チーム

<http://www.standards.dfes.gov.uk/eaz/>

- 13) ICT (Information and Communication Technology)、コミュニケーション能力と情報リテラシーを育てる教科である。これまでナショナルカリキュラムにおける情報教育 (Information Technology) は、各教科の中でそれぞれの教科特性を生かしながら教科横断的におこなう内容であった。キーステージ4においてはじめて「情報科」という独立教科になるが、選択必修であった。しかし2000年の改訂により、ICTはすべてのキーステージで必修教科となった。また各教科の中でもICTの活用が義務づけられている。

<http://www.nichibun-g.co.jp/joho/it-edu/001/i012326.htm>

<http://www.shinko-co.jp/koutou/magazine/39.htm>

平成16年 (2004) 11月30日受理

平成16年 (2004) 12月31日発行